



— 発行者 —
 福島県公立学校退職校長会
 福島支部長 鈴木昭雄

— 編集広報部 —
 第127号 — 題 字 —
 高橋 藤園

学年主任の一言

福島県公立学校退職校長会

福島支部監事 井本昌夫

新年早々「巻頭言」にはふさわしくない話題で気が引けるがご寛恕のほどお願いします。

私は福島市の郊外に居住しているが、ここ五、六年で自宅周辺の状況が様変わりしてしまっただけで、向こう三軒両隣をざつくり言えば、まず目に入るのが空家、時々娘さん夫婦が県外からやってくる。その隣家も一人暮らしの主人が亡くなって日も浅い。その又隣家は高齢女性の一人暮らし、目を転ずると放置の空地、隣りは引き籠もりの中年男性。少し地域を広げてみても、たぶん状況は大同小異だろう。テレビの限界集落の映像を他人事のように観ていた我が不明を恥ずかしく思う。

超高齢化、少子化、国力の衰えにより、日本は確実に凋落の季節を迎えつつある。高度成長期のような果実を得ることは夢物語である。そもそも今の若者は低成長の現状しか体験していないのだから、これがあたり前の世の中だと思っているのかもしれない。だから将来にも大それた夢など抱きようがない。そこそこの生活ができればいい、

年金もあてにならないのだから、と考えているのが大方かもしれない。こんな現状を目の当たりにすると、悲観的にならざるをえない。

失われつつある伝統的なイギリスを描いて高い評価を受けた小説に、カズオ・イシグロの『日の名残り』がある。国力が失われつつあるという点では今日の日本に当てはまるような気がする。イギリスは、斜陽といわれて一世以上経つたが、サッチャー政権下、北海油田開発が功を奏して経済を立て直し、没落することなく国力を維持し、政治・経済、文化において世界で重きをなしている。顧りみてイギリスに似た日本が良き「日の名残り」、いわばイギリス流の秋の残映を可能な限り持続させるにはどうしたらよいか。北海油田開発のような切り札がないだけに強いて挙げれば、これまで以上に人材という資源の開発(教育)に特化して注力するしかないのではないか。(そのためには少子化に歯止めをかけるなければならないが) 因みに、英国ではオックスフォードやケ

ンブリッジ大学出身者が小学校教師になる例が稀ではないと、かつて新書本で読んだ覚えがある。(現状は分からない。)

閑話休題、私の青年教師時代の拙い体験談で終わりとする。クラス(高二)の生徒(仮にA子)が欠席するようになり、当初はさほど気にもとめていなかったが、欠席日数が重なり、捨てては置かず家庭訪問したが、母が明かぬまま母親も困惑しきつていった。登校を促して辞去した。A子の友人と一緒に登校してくれようお願いしたが、依然欠席が続いた。友人が言うには、校門まで来るとA子ちゃん足がすくんで校内に入れないのだと。小柄で明るく元気な水泳部員のA子を知るだけに信じがたい行動であった。父親在宅の夜に再度家庭訪問をした。母親はおろおろと涙を流すばかり、父親は憤まんを押し殺して坐している。A子は無表情で暗く口を閉ざしたまま別人と化していった。私は全力で話しかけたが空気を振動させたに過ぎなかった。諦めにも似た気持ちで最後にA子に伝えた。「いつか話せるようになったら、手紙を書いて」と。それからも欠席は続いた。留年の懸念もあり、学年主任に相談した。主任は平穏な態度で、もうしばらく様子を見ていたらいだろうと。進級

の件については一切言及してこなかった。私はこの助言を素直に受けとめた。その後どれほど経つたろうか、A子から手紙が届いた。

A子が親友と思いつき合っていたB子が友達に誰かにA子など親友とは思っていないと話したらしい。その話が巡り巡って間接的にA子の耳に入った。面と向かって言われたのではなく間接的であっただけにこえってその受けたダメージは大きかったのだらう。親友に裏切られた思いから人間不信に陥ったのが原因のようであった。

A子は手紙を書くことで複雑にもつれた心の中の糸を一つ一つ解きほぐしたのだらう。時間という神の手を借り、自力で解決の糸口をつかみ、人間不信の心に一定の決着をつけることができたのである。その後も断続的に欠席や早退をしたが、ほぼ通常の高校生活に戻った。しかし、人間不信は尾を引き、彼女の表情にはかつての明るい輝きは見られなかった。

「登校拒否」とか「不登校」とかいう概念がいまだなかった当時(昭和四十年代)、暗中模索、必死にもがいていた私の急場を救ってくれたのは学年主任のあの一言であった。そしてその言葉は結果的に生徒ひとりをも救ったのである。

今、学校では 高等学校教育の現在

福島県高等学校長協会 県北支部長

丹野 純 一

(福島県立福島高等学校長)

新学習指導要領下で学んだ最初の卒業生が高校を巣立とうとしています。この間、高等学校教育をめぐる状況は大きく変化しており、その一端をお知らせしたいと思います。

でもあります。

第一に「探究的な学び」の進展です。以前の総合的な学習の時間は小・中学校と比べて高校では実践の広がりも深まりも今一步だったのですが、新課程の総合的な探究の時間においては、多くの高校で、地域の課題解決を目指した実践や生徒一人一人の興味関心に基づくプロジェクト型の学びが多種多様に展開されるようになりました。また、「世界史探究」、「古典探究」のように「探究」という言葉が含まれる科目がたくさん生まれ、教科学習も変化してきています。そして、それらの中で学ぶ意味を見出し進路実現につながる生徒も増えており、国公立大学合格率が上昇している一因

第二に「多様化」です。生徒一人一人に応じた「個別最適な学び」が求められる中で、学び方、学習のスタイルも多様化しており、その典型として、今年度からオンライン授業が大きく

高校に取り入れられる制度変更がありました。学ぶ意欲があるにもかかわらず登校できない不登校生徒が自宅等でオンラインで教室の授業を受講する場合には、校長の判断で出席と認めることができるようになったのです。通信制への転校や入学も大きく増えており、これまでの学校の在り方が揺らいでいるように感じます。また、特別な支援を要する生徒への指導について、本宮高校では「通級指導」が始まっており、他の高校でも徐々に教員の意識が変わりつつありますが、まだまだこれからの課題だと思います。

第三に、「教育DX(デジタル

トランスフォーメーション)の進展です。これは、近年の教育のデジタル化(パソコンやタブレット端末、電子黒板などの整備)のさらに先を行くもので、デジタル技術を活用して教育そのものを改革することです。今までと同じ授業スタイルで行うのではなく、今までなら実現できなかった授業や学習をデジタルの力を活用して実現したり、個に応じた学習プランを提供するなど、今までよりも効果的で効率的な教育が可能になり、少しずつ取組が進められております。特に、生成AIの普及により、生徒の学び方と教員の働き方は大きく変わろうとしています。AIを相手に対話して、学習を進めるスタイルが目

の前まで来ているように感じます。本校でも教員の指導に加えて、AIの力を借りて探究を進める生徒が出てきています。

このように、現在の高校教育は大きく変わろうとしており、部活動指導や進路指導、生徒指導など従来の教育に加えてこれらに対応する教員の負担は増す一方です。

「学校の在り方」を大胆に見直すべき時が来ていると思います。

理事 雑感



回想 南会津南郷

北部A 佐藤 哲

今日、大雪を伝えるニュースが流れ、「南会津界八十六cm」とありました。南会津界(さかい)は南会津町南郷地区にあり、南郷は私の校長初任地です。空から舞い降りてくる雪を見ると今でも南郷を思い出します。

南郷は南会津を流れる伊南川に沿って開けた地域で県内有数の豪雪地帯です。駒止トンネルが開通するまでは「陸の孤島」とも呼ばれていました。当時の校長は、給料日の前日は山を越えた田島町に前泊し、翌朝一番に銀行で全職員分の給料を受け取り、多額の現金を抱えながら再び山を越えて学校に戻り職員に給料を手渡ししていたのとこと。特に冬季は正に命懸けの出張だったので。

給食室には何枚かの習字が貼られていました。そこにはただどしい字で「火の用心」、その脇に「六才」という字と名前が書かれてありました。不思議なこと南郷地区のどの家庭でも玄関や居間には同じ様な習字

が貼られていました。その謎が解けたのはしばらくしてから。「六才」は「無災」であり、六才の子どもが書いたとても上手とは言えない習字を御守りとして大切にしているのです。

新学期が始まった頃、ある通学班がトンネル下の信号機の下に来た時に青信号が点滅しはじめてしまい、班長さんは渡るのを諦めました。その時私が「残念だったねえ。」と言うと、その年の一年生がため息混じりにこう言ったのです。

「あー、やっと思える。」ハッとしました。子どもたちが毎朝一時間近くも歩いて登校し夕方また来た道を帰って行く。たとえ吹雪の日でも歯を食いしばって登校して来る。子どもが毎日学校に来るのは当たり前と思っていたことは、決して当たり前ではなかったのです。

厳しい自然の中で、子どもたちを大切に南郷地区の皆さんとたくましく生きる子どもたちに囲まれながら、教育について多くのことを学ばせていただいた日々でした。

冬。家の屋根にも細い電線にも雪は同じ様に積りました。「子どもへ注ぐ愛情は平等に」これも雪からの教えでした。

ふれあい広場

― 方部活動報告 ―

地元の教育を見守る

松川 菅野 信幸

との連携協力をしながら、地域の特色を生かした教育活動を展開できるよう計画されていると感じました。

松川方部は、現在十四名(二名は他支部からの有志会員)で活動しています。方部独自の活動には、松川地区の現職の校長先生方との懇談会(夏)、懇親会(新春)があります。

今年度の懇談会は、日程が折り合わず中止となってしまいました。松川駅前(井寿々旅館)で開催しました。その様子を紹介します。松川地区の小中学校は、令和七年度から松陵義務教育学校として新たなスタートをきります。そのこともあり、現職の校長先生方のご厚意で懇親会の前(新校舎見学の機会を設定して)いただきました。

見学会では、真新しく明るい教室・アリーナ・現松川小学校の校舎とつながる連絡通路等を見学した後、校訓「歳寒松柏」のもとに始まる義務教育学校の学校運営について伺いました。説明では、義務教育学校としての特例や学区内の福島大学等

特に、三つのブロック、ファーストブロック(一〜四年)・セカンドブロック(五〜七年)・サードブロック(八・九年)を基盤とした教育活動の展開。一単位時間を同じくして無理なく九つの学年が接続、交流する工夫。

地域の学びを深めるための探究学習「松川学」とサードブロックにおける縦割りゼミの導入等の話がありました。

会員からは、義務教育学校となった意味やよさを、子供たちの姿を通して、保護者や地域の皆様に実感してもらえる教育活動を展開してほしい等とのエールがありました。



見学会

見学会終了後、会場を移動して懇親会になりました。話題の



懇親会

中心は、やはり義務教育学校に寄せられる思いでありました。ただ、金谷川小・下川崎小の現在の児童の様子や地域の方々の学校に対する思いを感慨深げに話されていたのが印象的でした。学校は地域の灯であることを切に感じました。(この灯を守り、融合させ、よりよい灯を創造する。そんな義務教育学校に！)

その他、お互いの近況を報告しあったり、体験話を話したり懇親を深めました。昨今の教育界を見ると、多忙化に伴う働き方改革、教職希望者の減少と講師不足等多くの課題が見られ、現場はまさに荒波の中です。

松川方部では、これからも新たに迎える松川地区の教育を見守っていききたいと思えます。

賀寿万歳

米畑 勇先生宅を訪問

本来ですと米畑 勇先生の九十五歳のお誕生日、十月六日にお伺いする予定でしたが、新年を迎えた一月十九日、先生の賀寿祝に、鈴木昭雄支部長、福地

郷土史クラブ

狛犬を訪ねて

吾妻 A 近野 元洋

私達は令和六年度から「狛犬巡り」を始めました。そのきっかけは、郡山市在住M・Sさん編集の「狛犬写真集」及び、「白河狛犬巡りの写真」を拝観したことによります。狛犬について、無知のところからの始まりでしたので、上記「狛犬写真集」を頼りに訪ねる狛犬を選びました。年三回に分け、「矢取八幡神社(二本松市小浜)」「安達太良神社(本宮市館ノ越)」「和田神社(本宮市和田字中ノ宮)」「白河神社(白河市旗宿字関ノ森)」「鹿島神社(白河市字大鹿島)」「踏瀬熊野神社(泉崎村字踏瀬)」「笠石熊野神社(鏡石町字笠石)」「石都古和氣神社(石

方部理事、福島大学同窓吾峰会 渋谷 朗支部長、飯沼信一評議員と一緒に訪問しました。賀寿状等は、ご都合により娘さんの二谷京子様にお渡ししました。

玄関に飾られていた先生のたぐさんのすてきな絵画作品が、とても印象的でした。

川町字下泉)」「松川町土合館公園内蔵島駒形神社」の九神社境内に鎮座している狛犬を探索しました。いずれの狛犬に表情、姿等同じものはありません。また、狛犬の台座には「還暦記念」と刻まれているものが在り、人生の節目のお祝いに奉納したと思われる信心深い人を想いました。また、石川町歴史民俗資料館で開催された「狛犬建立名工展」に「小松寅吉、小林和平」という歴史上の人がいたこと、出身地が高遠藩(現 長野県伊那市)であることを聞き、石工の出稼ぎの歴史が解り、有意義な狛犬探訪となりました。



新入会員

東部A 川名 健一

昨年三月に役職定年となり、教諭に降任して、現在も勤務しているため、日々の暮らし自体には大きな変化はない。ただ、この一年、自分の都合で、気軽に休みをとれるようになったこと、休日や長期休業等を何の憂いもなく気ままに過ごせたことはとても新鮮だった。

時間的、精神的余裕が生まれる一方、社会的活動や責任から切り離される。それが「新しい生活」なのだとすれば、順応するにも準備が必要だ。完全リタイアに向けて備えを進めたい。

北部A 高澤 正男

今でも毎日のように文章を書いていきます。校長時代には「校長室だより」を、現在は幼稚園の園長として「園長通信」を、「こころ」を出しています。この一月には、今までの原稿を一冊の書籍にまとめ出版しました。また民友新聞に月に一度のペースで随想を載せています。スクールアシスタントとして先生方と接することもありません。今後もHPやブログを使い文章を書いていくつもりです。校長を退いた者として発信できるものがあると考えています。



西部C 高橋 俊勝

退職後、感じることは感謝です。教壇に立ったばかりの私はとても未熟な人間でした。そんな私でも先輩の言葉や後ろ姿に導かれ、教師としてのゴールを迎えることができました。皆様に心から感謝申し上げます。

現在は家庭菜園にチャレンジしています。失敗の連続ですが、作物の成長を喜び、自然の不思議さを楽しんでいきます。

また、学校や先生方をサポートをする仕事をいただき、微力ですがお役に立てるように頑張っていきたいと思っています。

長寿祝い等記念品贈呈者様紹介

◎長寿祝い

◇賀寿贈呈(満九十五歳 息)

昭和四年四月二日
 昭和五年四月一日生
 工藤 忠様 米畑 勇様
 田中 光雄様 山川 進一様

◇賀詞贈呈(満八十八歳 全国)

昭和十一年四月二日

昭和十二年四月一日生
 松淵 四郎様 長久保宏人様
 高橋正二郎様 深澤 一榮様
 大槻 高仁様 鈴木 信良様
 佐々木 理様 朽木 耕作様
 佐藤 功様

◎叙勲・叙位

◇高齢者叙勲

齋藤 壽様 松淵 四郎様
 長久保宏人様 大槻 高仁様
 佐々木 理様

◇叙位・叙勲

中村 正直様 横山 成雄様
 古関 良一様 石幡 清朗様
 大槻 高仁様 田中 光雄様

◎各種功労者

◇福島市教育功労者表彰

丹野 学様

事務局より

◎第六十一回福島支部総会

◇日時 五月二十五日(日)

十時三十分～十三時三十分

◇場所 ホテル福島グリーンパレス

◇内容

○長寿祝記念品贈呈

○協議

・令和六年度事業報告

・同 決算報告

・令和七年度事業計画

・同 予算案

○懇親会

◎第五十九回福島県公立学校退職校長会会津大会

◇日時 六月十日(火)

十時三十分～十五時

◇場所 御蔵入交流館(田島)

◇大会次第

○開会式

○講演

合同会社ねっか

代表 脇坂 斉弘氏

「米焼酎ねっか 只見で生き抜く」

○体験発表

・伊達支部

・田村支部

・双葉支部

○大会宣言

○閉会式

※支部から十二名の参加予定

編集後記

◎ご逝去会員様
 (令和六年二月～令和七年二月)
 次の方々が逝去されましたので、方部理事・事務局が弔意を奉呈いたしました。

金子 忠雄様	中村 正直様
横山 成雄様	大場 眞一様
樋谷 孝一様	根本 歌子様
戸田 満夫様	後藤真太郎様
古関 良一様	石幡 清朗様
大槻 高仁様	田中 光雄様
佐藤 正良様	田崎 宗壽様

本年度の最終号をお届けします。個人的には広報を担当して三つ目の号。一つの号を発行して原稿執筆の礼状を認め、ほっとする間もなく取りかかる次号の原稿依頼。発行間隔、感覚に慣れることなく過ぎたこの一年。突然に原稿の依頼を差し上げ、ご迷惑をおかけした皆様にご心よりお詫び申し上げます。さて、こんな私に余裕が生まれるのはいつのことでしょう……

